

シンポジウムを終えて

小林, ふみ子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

101

(開始ページ / Start Page)

28

(終了ページ / End Page)

29

(発行年 / Year)

2020-03-24

シンポジウムを終えて

戦後の数十年にわたって、日本文学研究の世界において、強烈な個性をもった教授陣を擁した法政大学が燦然たる存在感を放っていた時代があります。それを牽引したのが、近代文学の小田切秀雄、古代文学の益田勝実、そして今年度のシンポジウムで光を当てた廣末保といった先生方でした（と、知らない若い学生たちのために書いておきます）。

ここ数年来の小田切・益田両先生の企画に続き、廣末先生のこのような事業ができたのは、ひとえに多くのご縁のあった方がた、廣末先生のご業績の意義を深く理解されている方にお声かけになり、『廣末保の仕事』をまとめあげられた日暮聖先生のご尽力、そしてそれらの方がたの惜しみないご協力の賜物です。このような冊子が完成し、そして学会当日のパネルディスカッションを経て本誌にこのような特集が組まれたことによって、「廣末保」のことばの難解さ、その思想性の深さゆえのある種のとりつく島のなさの前で立ちつくしていた私のような数世代あとの者たちが「廣末保」の読み方を知るための大きな手がかりが得られた思いです。

今回の企画で気づいたことについて、個人的な経験ながらも、大学の研究事業にかかわって記しておきたいことがあります。数年前から本学の研究ブランディング事業としてとり組んでいる江戸東京研究センターのプロジェクトの一環で、江戸の記憶をめぐる共同研究を行ってきました。そこでちょうど注目していたのが、大田南畝にしても山東京伝にしても、路上を往来する芸能民や零細な物売りたちに多大な関心を払い、この都市の欠くべからざる要素としてさかんに記録していることでした。「廣末保」を考える今回の企画を通じて、彼らにそれを記録させたのはたんなる珍奇な風俗への好奇心ではない、それは「遊行」の民にやむにやまれず向けられたま

なぎしであったということに思い至りました。テキストから芸能者たちのさまを知り、資料を集めてその背景を調べただけではわからない、そのような視線の意味、それを考える必要性に気づかせていただいたのです。「廣末保」をあらためて読みながら、そのような著作の声にさらに耳を傾けていきたいと思っています次第です。

末筆ながら今回ご登壇、そしてご寄稿くださった原道生先生、田中優子先生、本企画を主導されてきた日暮聖先生、また応援くださいましたすべての方がたにあらためて御礼申しあげます。

(小林ふみ子)